

[研究ノート]

## マクシミリアン1世の宮廷における音楽と知識人

Musik und Gelehrten am Hof Kaiser Maximilians I.

田中圭子

Tanaka Keiko

### 1 研究の視角

現代の音楽史研究において、ハプスブルク家のマクシミリアン1世（1486年よりローマ王、1508年より神聖ローマ皇帝、1519年没）は、この家系が生んだ一連の音楽芸術の庇護者たちのなかで、最初の重要な人物として位置づけられている<sup>(1)</sup>。

マクシミリアン自身が音楽を演奏したとの記録は見出されていないが、楽器や音楽理論についての知識は有していたようであり<sup>(2)</sup>、また、個人的な音楽愛好に加え、本稿において後述されるように、支配者としての自己表現あるいは演出の一環として音楽を積極的に活用したことが、パトロンとしてのマクシミリアンのイメージを決定的にしたといえるだろう。

マクシミリアンが、自己イメージの創出とプロパガンダを目的として、図像とテキストを組み合わせ用いたことはよく知られている。視覚芸術と文芸を結合した作品を次々と制作させ、そのためにアルプレヒト・デューラーを筆頭とする多数の画家と知識人が動員されたのである<sup>(3)</sup>。きわめて意識的に、同時代人のみならず後の世代にも伝えられるべき記録として作成されているこれらの作品に対して、音楽は本質的に演奏の終了とともに消え去ってゆく芸術であるため、記念碑的意義をもつマクシミリアンのための芸術作品群の中に位置づけられて考察されることは、比較的少なかったと言わざるをえない。しかし、宮廷とともに各地を移動しつつ統治を行ったマクシミリアンが、好んで楽団を随行させ、様々な機会に演奏させたこと、オルガニストのパウル・ホーフハイマーのようなすぐれた音楽家を厚遇したこと、また音楽に関する素養を理想の君主に相応しい能力と考えていたことは、事実である<sup>(4)</sup>。さらに、音楽を伴う演劇や合唱曲のように、音楽と言葉が結合した作品においては、聴衆に対してなんらかの具体的な主張を伝えることも可能であり、マクシミリアンの周辺で成立した作品の中には、上演の後に書物として印刷された例も存在する<sup>(5)</sup>。したがって、マクシミリアンの宮廷における音楽については、視覚芸術や文芸の場合と同様に、支配者の政治理念に沿ってその威信や主張を表現するための手段とみる視角を加えて、考察を行わねばならないであろう。

本稿においては、このような課題に取り組むための準備として、次の二つの作業を行いたい。第一に、マクシミリアン時代の音楽に関する先行研究を通観し、その動向を整理す

ること。ただし、楽曲分析や演奏様式の解明など、音楽そのものを考察の対象とする研究は、筆者の能力と問題関心の範囲を越えているため、ここでは扱わない。むしろ音楽的創作と演奏に関わる多様な活動とその担い手についての研究を主に取り上げることとする。第二に、支配者イメージの創出と演出の手段として音楽が活用された機会として、祝祭や音楽付きの演劇などに着目し、いくつかの事例を抽出して提示したい。

## 2 先行研究と課題

マクシミリアン1世時代の音楽に関する研究は19世紀に発し、この世紀の末には、ティロール総督府文書館（現ティロール州立文書館）に残された史料に基づくF. ヴァルトナーの研究が現れた<sup>(6)</sup>。次いで1907年には、ローマ時代からマクシミリアン時代までのウィーンの音楽史を叙述したJ. マントゥアーニの著作が刊行された<sup>(7)</sup>。その後20世紀半ばに至るまで、マクシミリアンの宮廷音楽を包括的に把握しようとする研究は現れず、マントゥアーニの書物はいわば研究の出発点として、参照と批判の対象であり続けたといえよう。

では20世紀の音楽史研究は何を目指したのか。それはまず第一に、各地の文書館に残る史料を徹底的に調査し、これに依拠して可能な限り具体的にマクシミリアンの宮廷における音楽活動の諸相を解明することであった。例えば宮廷楽団構成員についてのプロソポグラフィ的研究や、音楽に関係する会計記録の分析などである。その作業は、ほぼ世紀を通じて続行されたといえようが、とりわけ大戦間期にあたる1930年代前半、そして第二次大戦後の1950年代半ばに、多くの成果が公表された<sup>(8)</sup>。

これら諸研究に基づき、新たにマクシミリアン1世時代の音楽の全体像を提示することが試みられたのは、1960年代末以降であった。自らインスブルックの文書館史料を渉猟した経験をもつW. ゼンが、マクシミリアン没後450年を機に1969年に催された展覧会のカタログに寄稿した叙述は、短いながらも水準の高いものである<sup>(9)</sup>。次いで1977年には、『オーストリア音楽史』の一部として、G. グルーバーがこの課題に取り組んだ<sup>(10)</sup>。

その後は、美術史や文学史、社会史など隣接する諸分野との連携のもとに、さらに幅広い問題領域を含んで研究が展開される傾向にあるといえる。マクシミリアン1世が制作させた視覚芸術作品の中には、演奏する楽士たちなど音楽に関わる場面も数多く含まれているが、これらを、文書史料のみによっては知り得ない楽器の構造や演奏の実態を知るための情報源として活用し、なおかつそれ自体をひとつの表現として解釈しようとする方向性が考えられる<sup>(11)</sup>。

また、マクシミリアン時代の音楽と舞踏に関する1989年の専門家会議、そしてウィーンの宮廷楽団「創設」500周年を記念した1998年のシンポジウムにおいては<sup>(12)</sup>、器楽アンサンブルの編成やオルガン音楽、楽器の発展など音楽そのものに係わる主題と並んで、舞踏や槍試合、祝宴など、音楽が実際に演奏された祝祭的な場について、さらにパトロンとしての支配者と音楽との関係や、音楽作品におけるその反映についての検討が試みられているのである<sup>(13)</sup>。

宮廷における祝祭は、その主役である支配者の権威と権力を可視化して表現する場と

らえられ<sup>14</sup>、政治史と文化史が重なり合う領域として、近年盛んに研究されているが、そのフィールドに音楽史も接近しつつあるといえよう。また、宮廷の催しにおいて、音楽と組み合わせられるテキストや、催し全体のプログラム、演出などについて、支配者自身やその周辺の知識人たちによる関与が想定されるが、まさにこの点に、マクシミリアン時代の音楽と知識人の結び付きというテーマが新たに浮上してくる契機がある。

すでに1世紀前にマントゥアーニが、両者の関わりと、その中から生み出された合唱を伴う人文主義的演劇に着目していたが、そこで主に強調されたのは、古典古代の詩の韻律を音楽化する試みとしての側面であった<sup>15</sup>。しかし、現在の研究の視点からすると、問題となるのはむしろ、宮廷の音楽家と知識人が協働することによって、君主に対していかなる貢献をなすことができたか、という点であろう。

こうした動向をふまえ、H. クローネスは1998年に、やはり宮廷楽団「創設」50周年を記念した展覧会に際して、音楽はマクシミリアン1世による「文化政策」の一部であり、宮廷楽団はその副産物であると位置づけている<sup>16</sup>。よって今後の研究においては、マクシミリアンの政治と芸術に関する活動全体の中で音楽を把握する視点が不可欠であり、君主と音楽家の直接的関係のみならず、両者を仲介し、自ら創作にも関与しえた宮廷の知識人の活動に焦点を当てる必要があると考えられる。より具体的には、知識人と音楽家との協働の実態と可能性についての、個々の事例に即した解明、さらに各々の機会に表現された内容そのものの検討が課題となるであろう。

### 3 事 例

マクシミリアンの治世における祝祭としては、まず、1477年のマリー・ド・ブルゴーニュとの結婚から、1494年の息子フィリップへの統治権譲渡に至るまでの期間において、ガンやブリュージュのようなブルゴーニュ公領の都市で催された入市式や金羊毛騎士団関係の儀礼などがあげられる<sup>17</sup>。さらに、1486年のローマ王戴冠以来、帝国各地で槍試合や舞踏を伴う祝宴、あるいは聖体行列などが挙行されており<sup>18</sup>、帝国諸侯や都市の代表者、各国の使節たちが集う帝国議会を機に開催される例も多くみられる<sup>19</sup>。本節では、それら数多くの祝祭のうち、音楽や趣向において特色をもつとみられる事例、また音楽家と知識人の協働がみられる事例を時系列順に取り上げていくこととする。

マクシミリアンにとって、1486年2月16日のローマ王選出に続く、4月9日のアーヘンでの国王戴冠は、帝国の聖俗諸侯や都市の代表者たちの前で、将来の皇帝としての威厳を示す絶好の機会であった。ブルゴーニュの統治者であるマクシミリアンには、選抜された最高の音楽家たちが随行し、彼らにはブルゴーニュ公家の色である白・青・赤をあしらった衣装も用意されたという<sup>20</sup>。音楽による演出がいかにも重視されていたか、前年より準備が入念にすすめられていたことから窺い知られる。ただし、実際に演奏された曲目や演奏者についての詳細は伝えられていない。

1495年に開催されたヴォルムス帝国議会は、永久平和令の発布、一般帝国税の導入、帝国最高法院の設置など、帝国の体制再編に向けての成果をもたらし、国制史上重要な画期のひとつとみなされている。その一方で、父帝フリードリヒ3世の没後初めて開催された

帝国議会における、帝国諸侯へのレーエン授与<sup>(21)</sup>、さらにヴェルテンベルク伯領の公領への昇格は<sup>(22)</sup>、帝国の最高封主としてのマクシミリアンの存在を、強く印象づける効果を持ち得たのではないかと考えられる。その後の行事におけるマクシミリアンの振る舞いも、完全に中世的な騎士の理想に沿って演出されていたといえる。帝国議会が8月7日付けの最終決定を出して終了した後も<sup>(23)</sup>、マクシミリアンはヴォルムスに留まり、9月3日にオーバーマルクト広場で開催された馬上槍試合では、トランペットと太鼓の音楽が響き渡るなか<sup>(24)</sup>、ブルゴーニュの騎士クロード・ド・ヴォドレーと戦って勝利した<sup>(25)</sup>。また、その夜に円卓で供された宴では、「アーサー王の時代のごとく」伝説的な英雄たちの名で互いに呼び合ったといわれている<sup>(26)</sup>。

このように、1490年代までの祝祭には、ブルゴーニュで発展した騎士道的文化の影響が色濃くみられるが、それ以後は徐々に人文主義的要素が取り入れられる傾向が見て取られる。おそらく、その要因の一つは、マクシミリアンによる人文主義者コンラート・ツェルティスのウィーン大学への招聘（1497年）であっただろう。

ツェルティスは、1501年3月1日に謝肉祭の催しとして、自ら創作したラテン語劇『ディアーナの遊戯』(Ludus Dianae)を、リンツの王宮でマクシミリアンと彼の二度目の后ピアンカ・マリア・スフォルツァ、そして宮廷の人々の前で上演した<sup>(27)</sup>。メルクリウスが劇の幕を開け、ニンフたちとともに登場した狩の女神ディアーナが、このうえない狩人かつ英雄であるマクシミリアンに、その身をかがめて敬意を表するという趣向である。また、劇中には詩人ロンギヌスに桂冠を与える戴冠の儀礼も取り込まれていた。さらに、舞踏と器楽、3声ないし4声の合唱が付随しており、特に合唱において、ツェルティスの弟子ペトルス・トリトニウスにより、ラテン語詩の韻律を音楽化することが試みられた。当時、宮廷で盛んに演奏されていたブルゴーニュ流のポリフォニー音楽とは全く異なる様式で、例えばテキストにおける長音節と短音節に2:1の比となる長さの音を割り当て、すべての声部を同一のリズムで展開するのである<sup>(28)</sup>。なお、出演者24名の中には、作者自身のほか、マクシミリアンの秘書ヨーゼフ・グリュンペックら、宮廷の知識人が多く含まれており、劇の台本は、同年ニュルンベルクで出版された<sup>(29)</sup>。

ツェルティスによるもう一つのラテン語劇『ラプソーディア』(Rhapsodia)は1504年に成立した<sup>(30)</sup>。ポイボス(アポロー)やメルクリウスがマクシミリアンの戦勝(9月12日のバイエルン継承戦争における勝利)と君主としての優れた資質を賞賛し、来る皇帝戴冠とトルコに対する勝利、平和に満ちた治世をムーサたちが予告するといった内容で、『ディアーナの遊戯』と同じく合唱や舞踏を伴っていた。また、太陽を中心とした七つの惑星のように選挙侯が「皇帝」を囲む場面も含まれていたが、その場にマクシミリアンが臨席していなかったため、彼の役は出演者により演じられた。この作品は、おそらくツェルティス自身とハプスブルク家に仕える貴族の子弟たちによりウィーンで上演され、そのテキストは翌年同地で出版されている<sup>(31)</sup>。

1507年にコンスタンツで開かれた帝国議会は、ハインリヒ・イザークが4声のモテット「わたしたちには聖霊の恩寵がある」(Sancti Spiritus assit nobis gratia)と6声のモテット「最も思慮ある処女」(Virgo prudentissima)を作曲する契機となった<sup>(32)</sup>。この年の4月27日、マクシミリアンは1000人の騎士を引き連れてコンスタンツに入城し、4月30

日から7月26日まで議事が行われた。ここでの最大の課題は、ローマで皇帝戴冠を実現するための準備であった。帝国議会開催中は、槍試合や舞踏、祝宴など、音楽を伴う様々な催しに事欠かず、帝国最終決定の公布による閉会にあたっては、ラッパ手と鼓手が演奏し、ポーデン湖には花火が打ち上げられたという<sup>(33)</sup>。

モテット「最も思慮ある処女」は、その後間もない聖母被昇天祭（8月15日）に演奏されたと推測されている<sup>(34)</sup>。歌詞には、帝国とマクシミリアンのために、また勝利と平和のために、聖母にとりなしを願い祈る詩句が含まれ、皇帝戴冠のためのローマ征行が計画された時期に相応しい内容である。作詞者は、人文主義的素養を備えた宮廷楽団長、ゲオルク・フォン・スラトコニア（1513年よりウィーン司教）と考えられ、作曲者イザークとの密な協力関係の存在が予想される<sup>(35)</sup>。

1515年2月の謝肉祭の時期には、ウィーンの王宮で、ショッテン修道院の修道士ベネディクトゥス・ケリドニウス作のラテン語劇『快樂と美德の論争』（*Voluptatis cum virtute disceptatio*）が上演された<sup>(36)</sup>。観客の中には、マクシミリアンの孫マリア大公女と、皇帝の側近マテウス・ランク枢機卿がいたと伝えられる。ランクはこの時、マリアとその兄フェルディナントのヤギェウォ家との婚姻について交渉を行うための旅の途次であった。この作品では、快樂を代表するウェヌスやエピクロス、美德を代表するパラス（ミネルヴァ）やヘラクレスなど、様々な神や人間が相対立するが、その中で最終的な裁定者の役割を与えられていたのは、マリアの長兄カール（後の5世）であった。ただし、カール自身は当時ウィーンに滞在しておらず、その役はある貴族により演じられた。また、全3幕からなるこの作品では、それぞれの幕の終結部に4声の合唱曲が付けられており<sup>(37)</sup>、『ディアーナの遊戯』で音楽を手がけたトリトニウスの手法の影響が指摘されている<sup>(38)</sup>。劇のテキストは、合唱の楽譜とともに、1515年にウィーンで印刷された<sup>(39)</sup>。

その後、ハプスブルク家とヤギェウォ家の間で二重結婚契約が成立したことにより、マリア大公女とラヨシュ王子の結婚式、締結された契約の公布、そして祝賀の催しが、1515年7月にウィーンで盛大に挙行されることとなった。ハンガリー王ウラースロー、ポーランド王ジグムントを迎えてなされた交渉や儀礼など一連の出来事は、「ウィーン会議」と通称されているが、ここで展開された数々の催しは、マクシミリアンの宮廷における祝祭の集大成と称しうるほどのものであった<sup>(40)</sup>。

まず7月16日に、ウィーンからハンガリーとの国境までの中間地点に当たるトラウトマンズドルフにおいて、ヤギェウォ家の両王とその随行者たちをマクシミリアンが出迎えた際には、双方ともに楽隊を伴っており、ハプスブルク家側はラッパ手45名、鼓手6名を揃えて臨んだと伝えられる。翌17日に一行はウィーンへ入城し、18日に挙行されたミサでは、マクシミリアンの宮廷楽団による演奏が聞かれた。その後、28日に結婚契約が公布されて一連の行事が終了するまで、祝宴、舞踏、槍試合など、音楽を伴う催しが幾度も行われた。22日に聖シュテファン大聖堂で挙行されたマリアとラヨシュの結婚式のミサにおいて、パウル・ホーフハイマーが披露した見事なオルガン演奏は列席者の賞賛的となり、その後、彼はオルガニストでありながら騎士に叙される、という栄誉で報いられた<sup>(41)</sup>。また、「ウィーン会議」に先立ち、マクシミリアンはアルプレヒト・デューラーらに依頼していた絵画の仕事を急がせていた<sup>(42)</sup>。7月には木版画『マクシミリアン1世の凱旋門』の

ための下絵は完成しており<sup>(43)</sup>、ウィーンでの祝典行事に際して、この図が展示された可能性があると推測されている<sup>(44)</sup>。まさに、当代の第一人者による音楽と視覚芸術を、可能な限り祝祭の中に取り入れようとした試みであったと評せよう。

## 注釈

- (1) 「音楽のパトロンとして傑出した重要性をもつ、最初のハプスブルク家の君主」 Martin Picker, “Habsburg”, in: *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, vol.10, 2<sup>nd</sup> edition, London-New York, 2001, p.637. 「ハプスブルク家による音楽の庇護は、マクシミリアン1世のもとで最初の頂点に達した」 Elisabeth Th. Hilscher, “Habsburg”, in: *Die Musik in Geschichte und Gegenwart, Personenteil*, Bd.8, Kassel, 2002, Sp.359.
- (2) マクシミリアンは、宮廷の知識人や画家を動員して、自らを主人公とする伝記的物語や、関心を持つ様々な分野についての書物を作らせたが、彼の備忘録に残された記述によれば「音楽書」も構想していたようである。ただしこの書物は実現には至らなかった。 Alois Primisser (hrsg. v.), “Über des Kaisers Maximilian I. Gedenkbücher, in der k. k. Ambraser Sammlung”, in: *Taschenbuch für vaterländische Geschichte*, N.S.4, 1823, S.173; id. (hrsg. v.), “Zweytes Gedenkbuch des Kaisers Maximilian I., aus den Handschriften der k. k. Ambraser Sammlung zu Wien”, in: *Taschenbuch für vaterländische Geschichte*, N.S.5, 1824, S.69.
- (3) 例えば以下のような展覧会カタログを参照のこと。 *Ausstellung Maximilian I. in Innsbruck. Katalog*, Innsbruck, 1969 (以後、*Kat. Innsbruck*と略記する) ; *Kunst um 1492. Hispania-Austria. Die Katholischen Könige, Maximilian I. und die Anfänge der Casa de Austria in Spanien*, Milano, 1992.
- (4) マクシミリアンの自伝的物語『ヴァイスクーニツヒ』では、若き王は、ダビデとアレクサンドロスに倣って歌と楽器演奏を学んだと述べられている。 Alwin Schultz (hrsg. v.), “Der Weisskunig”, in: *Jahrbuch der Kunsthistorischen Sammlungen des Allerhöchsten Kaiserhauses*, Bd.6, 1888, S.80.
- (5) 注(29)、(31)、(35)、(39)参照。
- (6) マクシミリアンの宮廷楽団に関する研究史については、Theophil Antonicek, “Die Maximilianische Hofmusikkapelle im Urteil der Nachwelt - ein Forschungsbericht”, in: id. / Elisabeth Theresia Hilscher / Hartmut Krones (hrsg. v.), *Die Wiener Hofmusikkapelle I. Georg von Slatkonja und die Wiener Hofmusikkapelle*, Wien-Köln-Weimar, 1999, S.117-136. 19世紀当時には刊行に至らなかった先駆的研究と、ヴァルトナーの業績については、*ibid.*, S.117-120.
- (7) Josef Mantuani, *Die Musik in Wien: von der Römerzeit bis zur Zeit des Kaisers Max I.*, Wien, 1907, Nachdruck, Hildesheim, 1979.
- (8) ここでは、誌名 *Zeitschrift für Musikwissenschaft* を ZMW、*Anzeiger der phil. hist.*



- Klasse der Österreichischen Akademie der Wissenschaften*を*Anzeiger*と略記する。Adolf Kocircz, “Die Auflösung der Hofmusikkapelle nach dem Tode Kaiser Maximilians I.”, in: *ZMW*, Bd.13, 1930/31, S.531-540; Hertha Schweiger, “Archivalische Notizen zur Hofkantorei Kaiser Maximilians I.”, in: *ZMW*, Bd.14, 1931/32, S.363-374; Leopold Nowak, “Zur Geschichte der Musik am Hofe Kaiser Maximilians I.”, in: *Mitteilungen des Vereins für Geschichte der Stadt Wien*, Bd.12, 1932, S.71-91; Otto zur Nedden, “Zur Geschichte der Musik am Hofe Kaiser Maximilians I.”, in: *ZMW*, Bd.15, 1932/33, S.24-32; Georg Reichert, “Die Preces primariae-Register Kaiser Maximilians I. und seine Hofkapelle um 1508”, in: *Archiv für Musikwissenschaft*, Bd.11, 1954, S.103-119; Walter Senn, *Musik und Theater am Hof zu Innsbruck. Geschichte der Hofkapelle vom 15. Jahrhundert bis zu deren Auflösung im Jahre 1748*, Innsbruck, 1954, S.19-47; Othmar Wessely, “Neue Hofhaimeriana” in: *Anzeiger*, 92.Jahrgang, 1955, S.201-208; id., “Beiträge zur Geschichte der maximilianischen Hofkapelle”, in: *Anzeiger*, 92.Jahrgang, 1955, S.370-388; Hellmut Federhofer, “Die Niederländer an den Habsburgerhöfen in Österreich”, in: *Anzeiger*, 93.Jahrgang, 1956, S.102-120; Othmar Wessely, “Archivalische Beiträge zur Musikgeschichte des maximilianischen Hofes”, in: *Studien zur Musikwissenschaft*, Bd.23, 1956, S.79-134. 20世紀末には、マクシミリアン研究の第一人者である歴史家H. ヴィースフレッカーによって、音楽に関わる文書史料の探索は本質的な部分に関してはほぼ尽くされた、と評されるまでに至った。Hermann Wiesflecker, “Kaiser Maximilian I. und seine Hofmusikkapelle”, in: H. Ebner / P. W. Roth / I. Wiesflecker-Friedhuber (hrsg. v.), *Forschungen zur Geschichte des Alpen-Adria-Raumes. Festgabe für em. O. Prof. Dr. Othmar Pickl zum 70. Geburtstag*, Graz, 1997, S.444.
- (9) Walter Senn, “Maximilian und die Musik,” in: *Kat. Innsbruck*, S.73-85.
- (10) Gernot Gruber, “Beginn der Neuzeit”, in: Rudolf Flotzinger / Gernot Gruber (hrsg. v.), *Musikgeschichte Österreichs*, Bd.1, Graz-Wien-Köln, 1977, 2. Aufl., Wien-Köln-Weimar, 1995, S.169-211. 英語圏では、マクシミリアンの伝記的叙述と、ハインリヒ・イザークらの楽曲の分析的紹介からなる次の著作が刊行された。Louise Cuyler, *The Emperor Maximilian I and Music*, London, 1973.
- (11) Rolf Dammann, “Die Musik im Triumphzug Kaiser Maximilians I.,” in: *Archiv für Musikwissenschaft*, Bd. 31, 1974, S.245-289. 筆者は未見ながら次のような研究もなされている。Uta Henning, *Musica Maximiliana. Die Musikgraphiken in den bibliophilen Unternehmungen Kaiser Maximilian I.*, Ulm, 1987. また、中世から近世にかけてのオーストリア音楽史に関する図像史料の目録作成も試みられた。Walter Salmen, *Katalog der Bilder zur Musikgeschichte in Österreich, Teil 1: Bis 1600*, Innsbruck, 1980. こうした研究の登場は、1960年代以降の音楽史研究における、いわゆる音楽図像学 (Musikikonographie) の方法論への関心の高まりを反映したものである。音楽図像学については、Tilman Seebas, “Musikikonographie”, in: *Die*

- Musik in Geschichte und Gegenwart, Sachteil*, Bd.6, Kassel, 1997, Sp.1319-1343; id., “Iconography”, in: *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, vol.12, 2<sup>nd</sup> edition, London-New York, 2001, pp.54-71.
- (12) いずれも報告集が刊行されている。Walter Salmen (hrsg. v.), *Musik und Tanz zur Zeit Kaiser Maximilian I. Bericht über die am 21. und 22. Oktober 1989 in Innsbruck abgehaltene Fachtagung*, Innsbruck, 1992 (以後、*Musik und Tanz*と略記する); Antonicek / Hilscher / Krones, *op.cit.*
- (13) 例えば、Elisabeth Scheicher, “Quellen zu den Festen Kaiser Maximilians I.”, in: *Musik und Tanz*, S.9-19; Monika Fink, “Turnier- und Tanzveranstaltungen am Hofe Kaiser Maximilians I.”, in: *Musik und Tanz*, S.37-45; Keith Polk, “Patronage, Imperial Image, and the Emperor’s Musical Retinue: On the Road with Maximilian I.”, in: *Musik und Tanz*, S.79-88; Elisabeth Theresia Hilscher, “Der Wandel im Selbstverständnis des Fürsten als Voraussetzung für Widmungs- und Huldigungskompositionen”, in: Antonicek / Hilscher / Krones, *op.cit.*, S.171-176; Hartmut Krones, “Modale und numerologische Verweise in den Staatsmotetten um 1500”, in: Antonicek / Hilscher / Krones, *op.cit.*, S.177-199 (以後、“Staatsmotetten”と略記する)。我が国における研究としては、上尾信也「皇帝マクシミリアンのプロセッションと音世界の変容」、『桐朋学園大学短期大学紀要』12号、1994年、141～221頁。最新の研究報告としては、Helen Green, “Meetings of City and Court: Music and Ceremony in the Imperial Cities of Maximilian I”, in: Sieglinde Hartmann / Freimut Löser (hrsg. v.), *Kaiser Maximilian I. (1459-1519) und die Hofkultur seiner Zeit*, Wiesbaden, 2009, S.261-274.
- (14) ハプスブルク家の祝祭については、Karl Vocelka / Lynne Heller, *Die Lebenswelt der Habsburger. Kultur- und Mentalitätsgeschichte einer Familie*, Graz-Wien-Köln, 1997, S.263-287.
- (15) Mantuani, *op.cit.*, S.398ff.
- (16) Hartmut Krones, “Die Geschichte des Wiener Hofmusikkapelle bis zum Tod Kaiser Maximilians I.”, in: *Musica Imperialis. 500 Jahre Hofmusikkapelle in Wien 1498-1998*, Tutzing, 1998, S.24f. (以後、“Hofmusikkapelle”と略記する。)
- (17) Scheicher, *op.cit.*, S.9-19; Fink, *op.cit.*, S.37-45.
- (18) Scheicher, *op.cit.*; Fink, *op.cit.*; Green, *op.cit.*
- (19) ゼンらの研究によれば、マクシミリアンの楽団が参加したとみられる帝国議会は次の通り。ニュルンベルク帝国議会 (1491年)、ヴォルムス帝国議会 (1495年)、フライブルク帝国議会 (1498年)、アウクスブルク帝国議会 (1500年)、ケルン帝国議会 (1505年)、コンスタンツ帝国議会 (1507年)、アウクスブルク帝国議会 (1510年)、トリアー帝国議会 (1512年)、アウクスブルク帝国議会 (1518年)。Senn, *op.cit.*, S.77; Fink, *op.cit.*; Krones, “Hofmusikkapelle”, S.20; Green, *op.cit.*
- (20) ブルゴーニュ公家の年代記作者ジャン・モリネの報告による。Cuyler, *op.cit.*, pp.31ff.; Gruber, *op.cit.*, S.183f.



- (21) Heinz Angermeier (bearb. v.), *Deutsche Reichstagsakten. Mittlere Reihe, Bd.5 : Reichstag von Worms 1495*, Bd.1, Teil 2, Göttingen, 1981, Nr.599, S.658-682 (以後、*RTA MR 5*と略記する) ; *RTA MR 5*, Bd 2, Göttingen, 1981, Nr.1855, S.1689-1706.
- (22) *RTA MR 5*, Bd.1, Teil 2, Nr.1168-1169, 1172-1174, S.914-923.
- (23) 帝国最終決定をめぐる交渉は8月半ばまで続き、完成した文書が交付されたのは9月1日であったが、日付は8月7日にさかのぼって付けられた。その間に帝国諸侯の多くは帰路についた。Hermann Wiesflecker, *Kaiser Maximilian I. Das Reich, Österreich und Europa an der Wende zur Neuzeit*, Bd.2, Wien, 1975, S.241f. (以後、*KM*と略記する。)
- (24) Fink, *op.cit.*, S.40ff.
- (25) *RTA MR 5*, Bd 2, Nr.1857, S.1708-1711.
- (26) Wiesflecker, *KM*, Bd.2, S.237f.; Scheicher, *op.cit.*, S.13.
- (27) 『デアナーナの遊戯』については、Jan-Dirk Müller, “Maximilian und die Hybridisierung frühneuzeitlicher Hofkultur. Zum *Ludus Dianae* und der *Rhapsodia* des Konrad Celtis”, in: Hartmann / Löser, *op.cit.*, S.4-13.
- (28) Mantuani, *op.cit.*, S.402ff.; Gruber, *op.cit.*, S.203ff.
- (29) *Kat. Innsbruck*, Nr.384, S.102.
- (30) 『ラブソーディア』については、Müller, *op.cit.*, S.14-17.
- (31) *Kat. Innsbruck*, Nr.385, S.102.
- (32) Cuyler, *op.cit.*, pp.72-74; Martin Staehelin, “Isaac”, in: *Die Musik in Geschichte und Gegenwart, Personenteil*, Bd.9, Kassel, 2003, Sp.686.
- (33) Wiesflecker, *KM*, Bd.3, Wien, 1977, S.354-379.
- (34) Cuyler, *op.cit.*, pp.191-224; Hartmut Krones, “Staatsmotetten”, S.177-189.
- (35) カイラーは、スイス出身の人文学者ヨアヒム・ヴァディアンが<sup>5</sup>、スラトコニアと協力して作詞したものと考えている。Cuyler, *op.cit.*, pp.191f., なお、このモテットは、イザークの弟子ルートヴィヒ・ゼンフルが編纂した曲集に収録され、1520年にアウクスブルクで出版された。*Ibid.*; Krones, “Staatsmotetten”, S.178.
- (36) Margret Dietrich, “Chelidonium’ Spiel: “Voluptatis cum virtute disceptatio”, Wien 1515. Versuch einer Rekonstruktion der Inszenierung”, in: *Maske und Kothurn*, Bd. 5, 1959, S.44-59.
- (37) 作曲者はヤーコプ・ディアモントと言われるが、ディートリヒはこれを疑問視している。*Ibid.*, S.59.
- (38) トリトニウスは、ツェルティスから学んだ古典ラテン語詩を音楽化する手法についての著作を、1507年にアウクスブルクで出版している。*Kat. Innsbruck*, Nr.405, S.107.
- (39) *Kat. Innsbruck*, Nr.406, S.107f. 出版されたテキストには、上演日は2月20日と記されているが<sup>6</sup>、ランク枢機卿のウィーン滞在は2月23日から25日であるため、実際の上演はその期間内、おそらく25日と推測されている。Dietrich, *op.cit.*, S.44; Stephan

Füssel, *Riccardus Bartholinus Perusinus. Humanistische Panegyrik am Hofe Kaiser Maximilians I.*, Baden-Baden, 1987, S.120f.

- (40) ウィーンでの盛儀の様子については、二重結婚に関する交渉の過程と合わせて、マクシミリアン側の代表として交渉を行った人文学者ヨハネス・クスピニアン、ランク枢機卿の秘書を務めていたリッカルド・バルトリーニによって記録されている。Hans Ankwicz, “Das Tagebuch Cuspinians”, in; *Mitteilungen des Instituts für Österreichische Geschichtsforschung*, Bd.30, 1909, S.280-326; Füssel, *op.cit.*, S.75-140. 1515年のウィーンでの音楽的出来事に関する諸史料を入念に検討しているのは、Nowak, *op.cit.* ウィーンでの祝典についての詳細な叙述は、Wiesflecker, *KM*, Bd.4, München, 1981, S.181-204.
- (41) Herman Wiesflecker, “Kaiser Maxmilian I. und Paul Hofhaimer”, in: Helfried Valentinitzsch (hrsg. v.), *Recht und Geschichte: Festschrift Hermann Balzl zum 70. Geburtstag*, Graz, 1988, S.657f.
- (42) Thomas Ulrich Schauerte, *Die Ehrenpforte für Kaiser Maximilian I.*, München - Berlin, 2001, S.97, 413.
- (43) 拙稿「『マクシミリアン1世の凱旋門』成立史について」、西澤龍生編『近世軍事史の震央 — 人民の武装と皇帝凱旋—』彩流社、1992年、104頁。
- (44) Schauerte, *op.cit.*, S.97f. デューラーには、宮廷の人々の衣装デザインも依頼されたといわれている。Wiesflecker, *KM*, Bd.4, S.184.